

本質主義的思考の射程

網谷 祐一 Yuichi Amitani
(京都大学)

「種にかんする本質主義は、今日では決着の付いた問題である」(エリオット・ソーバー)。「素朴本質主義は誤りであり、またダーウィンの種の見方と根本的に相容れない」(ポール・グリフィス)。こうしたことばに見られるように、ここ数十年の生物学の哲学、特に生物体系学(生物を分類・系統解析の点から体系化する分野)の哲学においては、本質主義は幾たびも死刑宣告を受けてきた。特に、生物種(species)についての本質主義は、種を永遠の本質をもつという主張を含意するものとされ、種の歴史的变化と共時的変異を強調するダーウィン主義的な見方とまったく相反すると考えられてきた。しかし近年 J.ラポルテや R.ボイド、M.デヴィットらによって新たな本質主義説が提唱され、生物学の哲学でも本質主義についての議論が再び活発化してきている。

それをふまえて、本発表では次の二つのことを行いたい。まず、生物学の哲学における本質主義の議論を振り返り、さまざまな本質主義の立場を位置づける。というのは、一口に「本質主義」といっても論者によってその特徴付けには大きな違いがあり、また過去の本質主義批判においては、本質主義そのものというよりも、本質主義が含意するとされた主張(例えば、種の固定主義や種間境界線の鮮明さへのコミットメント)に批判の目が向けられてきたからである。そこで本発表では、ボイドらの提唱する恒常的性質クラスター説(HPC説)をそうした「バゲージ」をとりさった「最小限の本質主義」として捉える。

後半では認知心理学における心理的本質主義が種問題にもたらす影響について考える。心理的本質主義を奉じる心理学者は、ヒトは生物に対して本質主義的な見方を取る……たとえ何がその本質かわかっていなくても……心理的傾向性を備えていると主張する。換言すると、ヒトは生物について(もしかすると)生得的に方法論的本質主義者なのである。こうした「本質なき本質主義」の適用例は生物学史の中に数多く見いだされ、科学の説明的・予測的成功を支えてきたが、生物学の哲学では、集団思考(population thinking)や系統樹思考(tree thinking)、方法論的多元主義といったそれとは異なる方法論の原則が提唱されてきた。こうした状況をふまえて、本発表では自然史の哲学において心理的本質主義がどこまでの射程をもっているのか考える。